

2024年4月

課題本 『推し、燃ゆ』

宇佐見りん/著

河出書房新社

2020年

◆◆◆4月の読書会から

まずは先月の「私の一冊」感想文を読んで感じたことを語り合いました。実際に本を読んだ人もいて、さらに感想が広がっていきました。「私の」一冊、と選んだだけあって感想文もそれぞれの思いがあふれ出るものでした。

今月の課題本は『推し、燃ゆ』。作者、宇佐見りんが21歳で書いた小説でありこの本は芥川賞を受賞しています。アイドル上野真幸を追いかけ、彼が発する言葉を自分なりの解釈でネットに公開したり発売されるグッズを買い集めるなど推し活をしている主人公のあかり。その推しであるアイドルが人を殴って炎上するところから物語は始まる…。

課題本を楽しめた、理解に苦しんだ、と意見は分かれました。読書会ではそれぞれの意見にうなずき、笑い、これが読書会の醍醐味！と感じた時間となったのではないのでしょうか。

(文責:森下)

2024年4月 竹原読書会『推し、燃ゆ』

吉川五百枝

小心で、口数の少ない大学生の女孫が、珍しく大阪に続いて東京に一人で出かけた。広島県から出たくなくて、県内の大学を選んだ位の子だから、大阪も東京も、一人でウロウロする程の勇氣はない。よく思い切って一人で出かけたなと思って聞いてみると、居た、居た、「推し」が居た。いくら聞いても忘れるナントカというグループの中の一人だそうだ。その人に会えるチャンスがあると知って、スマホを頼りに、“魑魅魍魎”の県外に一人で行くことにしたのだ。

「推し」というものは、たいした力を与えるものらしい。

そういえば、この子の母親も(つまり私の娘だが)もう30年近く前になるが高校生の頃、「推し」に引かれて、イギリスに行った。

成績が良かったわけではなく、英語が得意なわけではない。ただ「推し」のTMネットワークにいる小室哲哉が、ロンドンに事務所を開いたから気軽に会えるかもしれない、ということだった。講座に友達も居た訳ではないのに、ホームステイの講座を利用して一人でロンドンに行ってきた。街中で、バスを乗り間違えたり、色々武勇伝があったらしいが、帰ってきた後、何も生活態度が変わることもなく、大学は、申し開きをするように英文科に行った。

「推し」を推すと、英会話の勉強を口実にしてでも一人でロンドンにも行くのだ。

「推し」の力は、恐るべし。

母子の遺伝子だから似ているのかもしれないが、そういう履歴の我が家だから、『推し、燃

ゆ』を読んでも驚くより、「そうか そうか」という場面が多い。

ただ、孫はともかく、娘がどのような精神状態で「推し」を推していたのか、まったく気が付かなくて、私は、上の空で「親」をやっていたのだなと改めて質された気がする。

娘が高校生の時「学校に行きたくない」と私に言ったそうだ。「すきにして良いよ」と答えたそうで、「そのくらいのものなら、じゃ行くかな」と思ったという話を後で聞かされた。「推し」の話も、イギリス行きの話も、学校に行きたくない話も、私は、同じ程度に聞き流していたのかもしれない。

そういう娘が、自分の娘の(つまり孫の)東京行きの際は、東京の地図をスマホに出して図上案内をしてやっていた。しっかり、「推し」の後方支援をしてやっている。“日本一のきびだんご”をつくってやっている桃太郎のおばあさんだ。

「推し」の力は、恐るべし。「推し」の力を知る者は恐るべし。

『推し、燃ゆ』で「推し」になっているのは「まざま座」という 5 人グループの「上野真幸くん」で、メンズ地下アイドルスターと言われる。推しているのは、「成美」と「あたし」事「あかり」だ。

「あかり」は、4 歳の時の出会いを皮切りに、当時 12 歳の「真幸くん」を推すことになったのだから年期が入っている。推していくには、写真、グッズが必須で、「あかり」の部屋はそれで飾られているようだ。

我が家の孫の部屋には、何も飾られていない。東京まで行って、握手してもらって、サイン入りのシャツやバッグを買って、それで満足したのに違いない。「あかり」の推しぶり比べると、かなり弱い。それでも、孫は自分のバイト代を注ぎ込んだらしいから、自力で押しをしているつもりなのだろう。

〈笑えるし、可愛いし、愛おしくて〉〈ああ、きょう、わたしなんとか生きていけるなって思います。命のともし火は、毎朝、推しにわけてもらう。〉 8800 円もする「推し」カラーの目覚まし時計を枕元に置いて、「あかり」は、そう言っている。

「そうか、そうか、そうなんだねえ」と私は思う。下宿近くのクリーニング店で大学の2年間バイトを続けて、自分で切符を買い、イベント参加のチケットを買って東京に行った孫が「あかり」と重なる。

「アイドルのおっかけ」と世間の人々は事もなげに言う。でも、「あかり」に代わって言う。「推し」を推すには、推すだけの理由があるのだと。その人にしか、いや、その人は説明できないかもしれないが、それでもその人だけの合理的な理由がある。つらさと引き換えに打ち込むことに、自分の存在の価値があると思っている。周囲からの声は、まともなことなのかもしれないが、自分にとっては、ただ「推し」の存在だけが、まともなことで、自分の呼吸をたすけてくれる。

「あかり」は、ただ「推し」だけを見ている。

だが、やがて「押し」が消えていく。「あかり」が「押し」を消したわけではない。

「押し」がアイドルスターでいることをやめ、一般人になったのだ。おまけに、グループ解散の記者会見では、「押し」の左手の薬指に銀色の指輪があった。SNS には賛否投稿の波が渦巻く。

推すことは、「あかり」の生きる手立てだった。それなのに、「押し」が人混みに呑みこまれ、見えなくなってしまう。「押し」を取り込むことは、自分を呼び覚ますことだった。「押し」の存在

を感じ取ることで、自分の存在を感じようとしていた。かつて

大人になんかなりたくないと呼んでいた12歳の「推し」が、大人になっていた。終わるのだ。ファイナル公演で耐え難い寂しさに襲われた。「おし」のいない人生は余生だった。

「あかり」は慄きながらも、「推し」を推すことで自分の作り上げてきた像を壊していこうとする。12歳の少年がおとなになったように、「あかり」もおとなになるのだ。たとえ這いつくばりながらも、大人は、自分の人生を生きていかなければならない。

50歳近い娘と、今年大学を卒業して職を得た孫に、「推し」を推す姿を重ねる。這いつくばるのが夫々の人生なら、それも受け入れよう。すたすたと歩くばかりがまともなのではないと思う。きっと“日本一のきびだんご”を作ってくれる誰かがいる。

今日は、日曜日に広島でコンサートがあるからと、嫁いでいる娘と孫娘が寄った。「推し」のグループがあるそうだ。ふと見るとスターライトリングが合わせて8つバッグの柄にじゃらじゃらしている。おお、ここにも「推し」の親娘が。

いいのだ。私も「推し」をしているのだもの。せっせと“日本一のきびだんご”を作っているのだ。

『推し、燃ゆ』を読んで

◆【 T 】

あかりは4歳の時、「ピーターパン」の舞台で演じる真幸を見た。その中で彼のセリフ、「大人になんかなりたくないよ。ネバーランドに行こうよ。」を聞き自分のための言葉だと思った。重さを背負って大人になることをつらいと思ってもいいのだと言われたような気がした。幼いなりに生きづらさを感じていたのだろう。時がたち、彼女が高1になった時、この舞台のDVDを見つけ再度見て、自分の苦しみを分かってくれる真幸に共感し彼の推しとなった。また、「作り笑ってだれも分かんないんだなあって、俺が思っていることなんて、ちっとも伝わんねえ…」「もしかしたら誰かひとりくらい分かってくれるかも。何かを見抜いてくれるかもって。」と思いながら表舞台に立っている真幸の中にあかりと同じ生きづらさを感じ、推しにのめりこんでいった。

あかりは、学校生活の中で、漢字や九九など何度繰り返して書いても唱えても、どうしてもみんなのように習得できなかった。仕事をしてもうまくいかなかった。みんなが難なくこなせる何気ない生活もままならなくて、苦しんでばかりであった。

あかりが姉に言った言葉、「別々に頑張ってるでいいじゃん。」は、今まで様々な問題に直面し、悩みながら生きてきたあかりだからこその言葉であろう。人は一人一人違う。出来ることも考えることも、出来ることでも、その到達度も。違いを認め合えない社会は、誰にとっても生きづらい社会になる。しかし、あかりは、推し一筋の自分を認めると共に、その生活に疑問を感じていた。感情の底にある疑問が最後の場面で綿棒拾い集める行動に結びついたのではないだろうか。

真幸は表舞台のことを忘れて人を殴って何かを破壊し、舞台を引退して恋人との生活を求めた。彼は、破壊しなければ生きていけない状況までおいつめられていたのだろう。あか

りも綿棒を投げつけ何かを破壊した。彼女は、何を破壊したのだろうか？推しを推す生活を破壊したのだろうか？散らばった綿棒を一本一本拾い集めた。彼女の再生の一步であろう。まだ、部屋に散らばっている白い黴の生えたおにぎりや空のコーラにペットボトルをはいつくばって拾うことで彼女の生活は、少しずつ変わっていくのではないだろうか？「はいつくばって」の言葉の中に、みっともなくとも、かっこ悪くとも少しずつ進んでいくあかりを象徴しているようだ。

◆【 N2 】

アルコール中毒、ギャンブル中毒と同じように、推し活中毒もあるのだろうか。

推し活は趣味の域を超え生活の一部に深く食い込んでいる。

推していた真幸がファンを殴ったことで SNS が炎上した。そして彼を応援するために、推しと繋がっていたいために、更なるグッズを購入しなければならない。居酒屋のバイト時間を増やす。炎上をきっかけにいろいろな変化が起き、学校生活や家庭生活、バイトも上手く回らなくなる。

あかりの家族はバラバラの時間をそれぞれが一生懸命に生きている。「別々に頑張ってるで良いじゃん」の言葉の通り、病院で病気と診断されたあかりも自分なりに頑張っている。一生懸命にしているのに普通の人が出来ることが、出来ない。出来ないことが自分にも解っていて苦しい、それが何故なのか病気のせいなのか解らずに苦しい。この苦しさを身近な大人は理解してくれない。読んでいるこちらまで苦しくなってくる。家族の誰もあかりを理解できず、あかりの悩みに寄り添う事が出来ない。気持ちにも時間にもゆとりが無いのかもしれない。姉がすこし理解してくれているようだが、母親は自分のやり方に沿わないと怒る。父親も自分の考える社会というものを口にするだけで、結局は赴任地へと逃げ帰る。父の言う「ずっと養っていくわけにはいかないんだよね、おれらも」この「おれらも」の言葉に冷たさと、娘を突き放した気持ちがありありと表れ泣けてくる。そして家を出され、あかりは独り暮らしをさせられてしまう。周囲の大人が理解してくれなくても、漢字のテストが出来なくても、推しを中心とする SNS の世界ではブログを書きファンもついている。ブログの世界では自分を生き生きと表現できているのが救いである。

十六歳という身体も精神も大人と子供の狭間で、大人になれないかもしれない、なりたくない、どうしたらなれるのかと悩み、ずーっとピーターパンと一緒にネバーランドに住んでいたかった。しかしいつも何かを睨むような目付きにエネルギーを溜めていた推しは、炎上を機にネバーランドを出てしまい、現実の洗濯物を干す女とシャツを見たあかりはネバーランドから出されてしまった。なぜあたしは普通に生活できないのだろう。人間の最低限度の生活がままならないのだろう。ただ生きていたらあたしの家が壊れていった。推しがなぜ人を殴ったのか、自分の手で大切な物を壊そうとしたのかその真相はわからないが深いところであかりと繋がっていたようだ。滅茶滅茶になったと思いたくないから自分から滅茶滅茶にしたかった。ぐちゃぐちゃの自分の部屋に戻り、推しと同じように何かを破壊したくなり、綿棒のケースを叩きつける。しばらくして気持ちが落ち着くと、後始末が楽な綿棒ケースを選んだことにわらいが

こみあげてくる。SNS 炎上をきっかけに燃え上がった火もやがて鎮火する、背骨としての推しを失ってしまったが、あかりがありのままの自分を肯定して生きる事を見つけたのにすこしほっとした。

◆【 KH 】

確かに、精緻な表現力。息もつかせず最後まで読み切らせる筆力。オススメでも、推薦でもなく“推し”。推す人の意志のこもる、でも現実感、実態、実感を伴わないそれは、“推し”と表現せざるを得ない。他の言葉ではダメな今の世界観が、しっかり存在することはとても納得できた。

推しが背骨と言い切る“あたし”
現実の人の暮らし、生身のふれあいとはキツパリ一線を画した、潔さ。
これしか私の生きる場所、意味を他に見出せない。
対象がいなくなった時に待っているのは、「虚無」
また、新たな推しを求めて彷徨うということなのか？

生身の人とコミュニケーションを取れない“あたし”。
その事実を肯定も否定もせず、作者は切り取り、“推し”を見事に解釈して見せてくれた作品だった。

引用『あたしを明確に傷つけたのは、彼女が抱えていた洗濯物だった。あたしの部屋にある大量のファイルや、写真や、CDや必死になって集めてきた大量のものよりもたった一枚のシャツが。一束の靴下が一人の人間の現在を感じさせる。引退した推しの現在をこれからも近くで見続ける人がいるという現実があった。もう追えない。。。アイドルでなくなった彼をいつまでも見て、解釈し続けることはできない。推しは人になった。』P121

引用『あたしはあたしを壊そうと思った。自分から滅茶苦茶にしてしまいたかった。でも、投げつけたのは始末の簡単な綿棒のケース這いつくばりながら、拾うこれがあたしのいきる姿勢だと思う。』

背骨を失ったあたしは、当然ながら2足歩行がおぼつかない。だから新たな背骨(あかりの次なる“推し”?)を獲得するまで、這いつくばりながら、でも生きて行く。上手いなあ。。。

私は、ものすごく頭が硬いのか、感性が錆び付いているのか、参加者の“推し”肯定説を聞き理解はできるけれど、決して心からウンウンとは頷けない、うら寂しさを抱えながら読書会から帰った。

というのは、昨日読書会に参加した後までの、わたしの胸にあった感想。

一夜明けて、思いついた。待てよ、、

“推し”という今流行りのワードに馴染めず毛嫌いしていたが、ひょっとして、この数ヶ月(いや、十数年かも)自分のやっていることは、今の若い人たちに言わせると、「それって“推し活”じゃん！」

推し“大田堯さん”推し“中村桂子さん”真面目に研究しておられる方々からは叱られそうだが。

推しの対象は、今は亡き100歳とか、現役88歳。そして流石にグッズはない。コンサートもない。しかし、著書を手元に集め、付箋はりまくり。人に勧め、時間と労力をつぎ込むことも厭わない。

これって、まるでというか、そっくり推し活だと気づいて愕然とした次第。

途端に、『推し 燃ゆ』が共感を覚える小説となったわけではないが、私の中で、拒絶反応も、うら寂しさも消えていた。

私の、“推し活”によって得たものは、仲間と集まって語り合い、手足頭を共に動かして何かをする楽しみと喜び。生身の交流。信じ、信じられ、頼り、当てにされる。うまくいかないこともたくさんあるが、みんなの知恵を集めると、これがなんとかなるのだ。これ以上生きがいを感じられる事は他にない。だから、私はわたしの“推し活”を、気の向く限り続けていくのだと思う。

そして、頭の固いことを言っていないで、小さい人をはじめとする老若男女に、この本は推しよ！とオススメ本(絵本も)を手渡してみようかと、思い始めている。

さらにさらに、最後に吉川先生がさらりと語られた、桃太郎のお話。

桃太郎＝鬼退治 というおきまりの理解しか持たなかった私は、新しい気づきをいただいて、感動している。恐ろしい鬼退治に行く桃太郎のために、おばあさんは、日本一のきびだんごを作り、持たせてやる。この後ろ盾があったからこそ、桃太郎は冒険に出かけることができたのだ。無償の“愛”ではなく“信じる”こと。ただただ、信じて桃太郎を送り出した。おばあさんは見返りを求めている。そういえば、“推し”も見返りは求めない。なんと、なんと深いこと。。

◆【 K子 】

二十歳を四回迎えた身には大変堪える作品でした。

時代・環境・家族構成・何ひとつ類似点が無いのです。作品の内容・主人公の推移していく心の様子等は筆の力でとてもよく理解出来ました。悲しいカナ.. 主人公の心理に「わかる・解る」が見いだせなかったのです。作者は 25 歳、2 作目のこの作品で芥川賞受賞。この作品は大ヒットしたのです。と言うことは世の中に受け入れられ多くの人々が共感したのです。まさに時代ド真ん中。

主人公「山下あかり＝4歳」が推しとなった「上野真幸＝12歳」との出会いから推しの結婚・グループ解散・芸能界引退までの過程 推し燃ゆまで私が赤線を引いた箇所は p.108 の「推すことはあたしの生きる手立だった。業だった」最後の場面がとても印象的です。主人

公の未来を予想させる様に描かれています。「綿棒を膝をつき頭を垂れてお骨をひろうみたいに丁寧にひろったのです」

余談

推しとは何ぞや「ご贔負＝谷町」「ファンクラブ＝追っかけ」昔から色々な言葉がありますが、現在使用されている「推し」は過去のものとは少し意味合いが異なるのではと思っていますが…

◆【望月悦子】

今回の課題本は、80歳の私には理解に苦しむ内容であった。何をどう読み取ればよいのか。時代の流れ？社会情勢？物欲？若者の価値観？？

しかし、例会でメンバー一人一人の話を聞いているうちに見えてきたように思えた。特に80代の彼女と50代の彼女、30歳の年の差が古文と現代文の解釈の違いにあるようだということに納得できた。彼女たちの会話はまるで漫談を聞くようで実に面白かった。

今回の課題本について『わからん分からん』と逃げるのではなく、自分なりに考えたことをまとめることにした。

現代の生きにくい社会において、特殊な育ちの中で、これでもかと言わんばかりの主人公あかりの性格・個性・生き方を詳細に表現している。それは唯一の希望あるいは生きるための糧である「推し」を鮮明にするためなのか。何もかも失った主人公あかねは最後「片付けが簡単な綿棒を選びました。そして、それを拾いながら、こうやって這いつくばって生きようと思うのです」とこの作品は結ばれている。

例会で吉川先生は「ゆうでんゆうでん ゆうたくゆうたく？・？・？」とおっしゃったが、聞いたことのない言葉で何のことが分からず、しかし、課題本を理解するための鍵がありそうだと思うので、調べてみた。「有田憂田。有宅憂宅。(略)無田亦憂、欲有田。無宅亦憂。欲有宅。(田あれば田を憂う。宅あれば宅を憂う。田なければまた憂えて田あらんと欲う。宅なければまた憂えて宅あらんと欲う)』『仏説無量寿経』の一節であることが分かった。先生は分かりやすく「無いときには「有ればいいのに」と思うけど、では有ったら満足かというそうでない。有れば有ったで、無いときには味わいもしなかった様々な憂いごとができるのだ」と解説してくださいました。そこから、この本を見直してみると「推し」とは自分に無いものに憧れや夢として、犠牲を伴いながらも夢中になって追っかけたり憧れたりする人間が本来持っている習性みたいなものなんだろうか。主人公あかりはドロドロした「推し」の生活を体験したから、自分に合った本当の生き方、自分らしく生きることを見つけたことができたと言いたかったのだろうか。現代では「推し活」という言葉を度々耳にする。この本は若者の現代の生活内容なのに何故題名を「推し活」とか「推し燃える」にしないで「推し燃ゆ」と文語体にしたのだろうか。

疑問は尽きないけれど、今回の課題本は、生きにくい世の中で若者に価値観は多様で、失敗を体験しながら夢を追いかけ、いろんな人と交流しながら、自分らしく元気に生きるんだよとエールを送っているような本ではないかと思えた。

課題本でなければ決して手にしない本だけれど、日ごろ使わない「脳」を酷使した感じがした。これが読書会の良い点でもあるのかと改めて感じさせられた。

◆【 MM 】

まぶしい。みずみずしい。『推し、燃ゆ』を初めて読んだときそう思った。言葉にするのが難しいことをここまでリアルに表現できるのか。生きにくい現実の生々しさ、家族に理解されない苛立ち、自分のことも思うようにいかないもどかしさ、焦り。この人が書いたものを読みたい。そう思って過去の作品も読んだし、新しいものが出たらすぐ読んだ。まだ3作しかないのか。これからが楽しみな作家の一人となった。

追っかけ、オタク、推し活…。呼び方は違うが今も昔も変わらない気がする。気に入っている人、ことを追いかけること。のめり込む度合いも異なるだろうが、誰にでもお気に入りはあるのではないだろうか。それなのに新しさを感じるのはなぜだろう。今の傾向にうまく乗った言葉遣いがうまい。のっかるというよりも現代を生きる若い作家ならではの感性か。練りに練られたベテラン作家の手腕にも驚くが、新しい感性のみずみずしさにも驚かされた。こういう出会いがあるから読書って本当に楽しい。

もがきながら生きていく、大人になっていく。うまくまとめられた最後でもなく、あかりはあかりで生きていく、という感じにとっても好感が持てた。これからもぶつかりながらつまづきながらいくのだろう。でもそれでいい。母親にも姉にも理解されない推し活。怠けているわけではない、現を抜かしているわけでもない。あかりの居場所が推し活の中にある、というだけだ。その推しがいなくなるかもしれない、私の居場所は…。綱渡りのような心細さ、不安がよく表されているなあと思った。

読書会では思いつくままに熱く語ってしまった。そうさせる力がこの作品にはあった。ベテラン作家に比べたら物足りないのかもしれない。いや、比べなくてもいいのだ。まだ駆けだしたばかりだ。これからが楽しみだぞ～とわくわくする。こうしてお気に入りが増えていく。